

はじまりの島の終わりになき挑戦

「兵庫県南あわじ市沼島」

仲田 成徳



沼島のシンボル・上立神岩。

旧知の島を訪ねる

『古事記』などでは、大八洲^{おおやしま}で最初に誕生した島（洲）は淡路島といわれるが、神話に登場する日本列島を生み出す礎たる「おのころ島」はどこかということがよく問われる。紀淡海峡^{きたんかい}の友ヶ島、淡路島の一部であった絵島、自凝島^{おのしづめ}など古代史論争の一つとなってい

を際立たせている。

令和三年一〇月、南あわじ市沼島出張所の山見嘉啓^{よしひろ}所長と一年ぶりに再会し、島を案内してもらった機会を得た。山見所長は沼島の生まれ育ちで、親子二代「全国離島青年会議」に参加、私とは旧知の仲である。

沼島の人口は現在四一三人（令和三年

るが、私個人の見解としては、位置的なものに加えて、結晶片岩からなる古い地質的な特徴や成り立ちなどからも沼島^{ぬしま}がもつとも条件を満たしていると思っ

ている。何といても天沼矛^{あめのぬぼこ}に酷似した上立^{かみたて}神岩^{がみいわ}の存在がその事柄

一〇月末）、そのうち約一〇〇人が漁業に従事している。漁業は、基幹産業というより島唯一の産業と言っても過言ではないが、漁獲量・魚価ともに低迷が続く、厳しい状況が続いている。陸^{おか}ではイノシシ被害が著しく、島内外の協力を得て捕獲している状態。松枯れ被害も全島に広がり、がけ崩れ、崩落拡大箇所も多くなっていた。

少子化により島唯一の「ぬしま保育園」が昨年九月末で閉園。市立沼島小中学校の存続もたびたび議論されているが、小規模校であるメリットを生かしたICT教育や英語教育に力を入れており、淡路島から渡ってくる「渡船通学」の児童もいる。次の展開として、全国から入学生を募集する「離島留学」制度の導入も視野に入れているという。

漁観連携、情報技術による観光振興

近年、沼島の観光需要は高まっており、島の将来のためにも漁業と融合した観光産業に力を入れることは重要であろう。沼島と対岸（淡路島）の土生港との間には一日一〇便が運航しており、それと接続するコミュニティバスも運行されているなど、交流のための基盤は整備されている。漁業者が漁船で島を外周から案内する「おのころクルーズ」は、平成二五年の開始以来、順調に利用客が増えており、コロナ禍でも堅調に推移している。また、島の中の観光スポットでは、令和二年よりQRコードを読み取ると音声ガイドが流れ



南あわじ市沼島出張所の山見嘉啓所長。沼島総合センター前にて。

るサービスをこなしている。

ただし、宿泊施設が少なく、来島者のほとんどが日帰り観光という現状であり、今後は観光客の島内消費額をいかに増やしていくかが課題だといえる。

沼島と淡路島の間には中央構造線が走っており、南海トラフ地震に備えて、防波堤やパラベット（波返し）の高上げ、水門や陸間の整備が県事業で大規模に進められている。また、令和三年三月に新しい消防防災艇「たてがみ」が市の補助により建造され、以前と同様に沼島漁協が所有・運用している。さらに、来年度は淡路島から二系統ある海底送水管のうち四〇年が経過した一本の敷設替えが予定されている。老朽化インフラの更新は、沼島に限らず全国の島々に共通する課題だ。県と市が実施する振興事業の展開と島からの情報発信により、最近では地域おこし協力隊を含む移住者も現れてきており、関係人口も増加傾向にあるという。

出張所の仕事は住民向けの窓口業務に限らず、獣害対策、診療所の維持、介護・福祉への対応強化など多岐にわたる。山見所長は沼島と淡路島を行き来しながら、地域と行政（市や県）との調整役を担っている。地域課題に地道に向き合うには、彼とともに島のために活動する人材の確保が必要である。地域づくりに果てはなく、はじまりの島に終わりがあつてはならない。

（日本離島センター事務局長）



沼島漁協が所有する消防防災艇「たてがみ」。